

閻魔王宮から持ち帰った曼荼羅

(下槻瀬)

下槻瀬の蓮花寺には、尊恵上人というえらいお坊さんにまつわる曼荼羅と、お経、数珠が大切に納められています。有馬周辺でいくつものお寺を開いたり、建て直したりしました。蓮花寺もその恩恵を受けたお寺の一つだったのです。どうして、その曼荼羅、お経、数珠が大切にされているのかお話ししましょう。

尊恵上人が久しぶりに清澄寺(宝塚市清荒神)に戻った、ある晩のことです。うたた寝をしていると、夢の中にきれいな衣を着た男女二人と子ども三人が手紙を持って出てきました。その手紙は閻魔王宮からのものでした。

「三日後の朝早く、閻魔大王の宮殿で十万人のお経を読む大きな法会を行います。十万人の国から十万人のお坊さんをお呼びになりました。あなたは、その一人に選ばれましたから、必ずお越し下さい。これは大王の命令でもあります。」

翌朝日がさめるや、みなにこのことを話しました。

「ありがたいお経を守る者として、この国にあなたの名を知らない者はいませんが、とうとう地獄の閻魔さまにまで聞こえてしまったようですね。」

「閻魔さまのところに招かれて再びこの世に帰ることができるとは思えません。どうしたものでしょう。」

みなは尊恵上人ともども、このことを大変心配しました。

とうとうその日がやってきました。尊恵上人は心を決めて、仏の世界をしるした曼荼羅、お経、水晶でできた数珠を持って、お別れの念仏を唱えました。

そのうち、たえがたい眠気におそわれ、「少し眠る」と言っただま息をひきとりました。清澄寺は深い悲しみにつつまれました。ところが、ふしぎなことに尊恵上人が持っている曼荼羅、お経、数珠は消えていました。

尊恵上人の魂は、手紙を持ってきた男女と子どもの一行に連れられ、閻魔大王の宮殿に行きました。その手には曼荼羅、お経、数珠がしっかりと握られています。

法会が始まり、集まってきた十万人のお坊さんに混じって、尊恵上人も曼荼羅をかけた、数珠を握って、一心にお

経を唱えました。

法会が終わると、閻魔さまは十万人のお坊さんの行き先を決めていきました。尊恵上人の番となりました。

「これからどうするのだ。」

「再び生きるのか、そうでないのかは、人々が心から私を信じ、敬つてもらえているかどうかによります。」

「なるほど。それでは聞くが、平清盛という力を持ったものがおるが、摂津の和田岬に館を作り、わしと同じように千人の僧を集め、七日の間大きな法会を開こうとしている。この行いは、いったいどういったものだ。」

それは、この国を支配していた平家の頭領平清盛が、人々の反対を押し切つて、都を京都から福原（神戸）に移そうとしていたのです。

「それは、清盛公のこれからのことを願つてのことでしょう。でも、大事なことは、本当に仏を信じる心があるかどうかだと思えます。」

「なるほど。清盛はどうも悪人と見える。だが、そやつは慈恵大僧正の生まれ変わりのようだ。その人に一日三度祈りをささげなさいとの書き付けがある……。」

閻魔さまが言っている途中に、尊恵上人は目を覚まし

した。曼荼羅と、お経、数珠をしつかり手に持つて……。

上人が夢のように思っていた、この出来事の間七日も日が過ぎていました。その間中、見守ってくれた多くのお坊さんたちと共に生き返ったことを大いに喜び合いました。そして、平清盛に会うため都に向かいました。

このことを聞きつけた清盛は、すぐに上人に会いました。自分が天下のえらいお坊さんの生まれ変わりと聞いた清盛は、たいそう喜び、上人にほうびをとらせたということです。

閻魔王宮から持ち帰った曼荼羅とお経、水晶の数珠は、上人が亡くなったのち、蓮花寺に伝えられたと言われています。しかし、これらの品は大きな戦いに紛れて、一度行方不明になりました。その時、お寺にいた弁能、円海、良真というお坊さんがやつとのことで探し出し、お寺に戻すことができたそうです。

